

目の前のひとりの生きてきて良かったを、日本の医療から

JAPAN HEART NEWS



新病院のセンターサークルにて 開院式列席者の皆さまと(カンボジア)



Japan
Heart

2025
WINTER

- 01 : カンボジア 「アジア小児医療センター開院式レポート」
- 02 : ミャンマー 「大地震から半年以上。街は、そして人々の暮らしは今——」
- 03 : ラオス 「プロジェクト初、小児がんの手術が実現」
- 04 : 災害支援・対策 「南海トラフ被災想定地・高知県での防災訓練と能登」
- 05 : スマイルスマイルプロジェクト 「れんくんの想いで実現した、家族の時間」
- 06 : 吉岡秀人 海外医療活動30周年

01 カンボジア

ついに開院! ジャパンハート アジア小児医療センター 開院式レポート



10月31日、カンボジア・プノンペン近郊にジャパンハートアジア小児医療センターが開院しました。

開院式当日は、駐カンボジア日本国特命全権大使・植野篤志閣下、カンボジア王国保健省大臣・チアン ラー閣下、日本の支援者や支援企業をはじめ、両国から約300名が参加しました（ジャパンハート関係者含む）。

開院式は、現地僧侶による祈祷からスタート。その後は、本プロジェクトの構想者でもある吉岡秀人によるウェルカムスピーチや各ゲストによるスピーチを行いました。

スピーチでは改めて両国の多大な協力に感謝を伝えるとともに、子どもがつらい治療のなかでも笑顔になれる病院を目指すこと、そしてこの病院での学びがカンボジア、ゆくゆくはアジア全土へと広がっていくことへの願いなどを語りました。

カンボジア王国保健省大臣よりメダルが授与されました



また、新病院開院に際し、吉岡秀人や本プロジェクトの責任者を務めた佐藤抄など5名に、社会貢献などに対して国王から授与される最高位の名誉勳章が授与されました。

吉岡、植野大使、チアンラー大臣によるリボンカットを行い、開院式は無事閉会。

その後は参加者を病棟内をご案内し、病院の中央に位置するセンターサークルや病室の様子を見学していただきました。

約3年にわたるプロジェクトがついに実を結び、新病院を開院することができました。これもひとえにご支援、応援をしてくださった皆さまのおかげです。改めて感謝申し上げます。

開院はゴールではなく、スタートです。ここでより多くの命を救えるよう、そしてここからカンボジア、アジアの医療を支える医療が生まれるよう、尽力してまいります。引き続き応援いただけますと嬉しいです。

開院式参加者より

嘉数真理子医師

開院式を終えて、改めて多くの方々に支援、応援いただいていることを感じました。患者さんに優しく、慈愛に満ちた病院となるよう、みんなで頑張っていきたいと思います。



楽天グループ株式会社 常務執行役員
Group CCuO(Chief Culture Officer) 小林正忠様

新病院を実際に見てみて、随所に子どもたちへの愛を感じました。現地スタッフがここでたくさんの経験ができると良いと思います。同時に、多くの日本人医師がここにやってくることによって、日本の医療も向上し、日本の未来が明るくなることを期待しています。



中外製薬株式会社 上席執行役員 矢野嘉行様

子どものための病院を作っていくという想いや、この病院とスタッフがカンボジア、さらにはアジアの医療に貢献していくことを強く感じました。私たちも日本やアジアの小児医療に貢献していきたいと考えておりますが、ぜひこの病院で新たな小児医療をつくっていっていただきたいと思います。



子どもたち、そして未来の医療者に確かな医療と学びを— ジャパンハートアジア小児医療センターとは

新病院は、これまでの経験と想いを受け継ぎながら、より多くの子どもたちに安心と笑顔を届けられる場所へと大きく進化します。ハード面では、まず小児病床数がこれまでの50床から200床へと大幅に拡充し、より多くの子どもたちに医療を届けることが可能になります。手術室は日本と同等レベルの高性能な設備を整え、より安全性の高い環境で手術を行えるようになります。また、新病院はプノンペン近郊の新空港近くに位置し、アクセスが格段に向上。これにより、国内外からの患者受け入れもよりスムーズに行える体制が整います。さらに、電子カルテの導入やこれまでになかった医療機器の整備を通して、現地医療者の育成にも一層力を入れ、学びと成長の拠点としての役割も強化していきます。

一方で、ハード面だけでなく「子どもの心に寄り添う」ソフト面の充実も進んでいます。子どもたちの入院期間は約1年。成長の真ん中にいる子どもたちが、「痛い」「怖い」だけじゃなく、「楽しい」「また来たい」と思える場所を目指しています。

そのなかで、新たに発足した子ども支援スタッフや、子どもたちにとってお兄さん・お姉さんのような存在であるインターン学生が中心となり、「子どもニーズ会議」を立ち上げました。これは、子どもたち自身の声を聴き、「やってみたい」「こうしてほしい」という想いを実際の活動や環境づくりに反映していくためのチームです。これにとどまらず、今後も患者と家族の人生の質向上や、心を救う独自の取り組みを段階的に実装していく予定です。



子どもニーズ会議の様子

新病院は、医療の質だけでなく、子どもたちの笑顔があふれる温かな空間として新たな一步を踏み出します。ここまで歩みを支えてくださった皆さまの想いが、確かにこの場所の中に息づいています。

02 ミャンマー 大地震から半年以上。街は、そして人々の暮らしは今――

震災から前進するも情勢悪化の苦難が続くミャンマー。 さまざまな形で、新たな拠点で、目の前の命に向き合う

3月末に発生した未曾有の大地震から半年以上が経過し、震源地となったザガイン周辺の風景や、そこでの私たちの活動も様々に変化してきています。

街の中心部から離れるとまだそのままとなっている場所もありますが、街中では倒壊家屋や瓦礫は撤去され、一部では再建も始まっています。6月には新学期が始まり、校庭では制服に身を包んだ子どもたちの声が響き、路上の市場には多くの肉や野菜などの生鮮食品が並んで、買い出しに訪れる人々で街には活気が戻りつつあります。

発災翌日から実施してきた災害支援活動は、7チームの緊急支援チーム派遣、4カ所の救急受け入れ病院への緊急医療物資支援、約4,700世帯に対する食糧および生活物資の支援、被災地域を巡回してのべ5,000人以上(拠点病院での屋外診療含む)の診察を実施し、約5ヵ月間に渡る活動を8月末で終了しています。



人々にも活気と笑顔が戻ってきました

また地震によって被害を受けたワッヂェ慈善病院では、被災直後より補修工事に着手し、6月には一部の手術活動を、そして8月初旬には本格的に医療活動を再開しました。表面的には復興に向かっているように見えても、まだまだ多くの困難を抱えている被災地。



治療を終え、笑顔で村に帰るイーさん

私たちはここで長く活動を続けてきた団体として、ここワッヂェ病院から引き続き現場に根付いた形で人々をサポートしています。

そして私たちが被災地で巡回していた際に出会い、活動再開後のワッヂェ病院で手術を受けた患者さんたちもいます。その一人であるイーさんは、5年前に頭部にできた腫瘍が少しずつ大きくなり、体の不調もあつたにも関わらず、経済的な問題で治療を受けられずにいました。地震直後の4月に私たちの巡回診療の噂を聞いてやって来た時には、頭の腫瘍は破れて感染を起こし、強い臭いを放っていたため、ワッヂェ病院が一部再開した6月と7月の2回に渡って手術を行いました。術後には「このまま悪くなってくのかな…と諦めていた。地震は大変だったけど、そこで日本のチームと出会えて本当に良かった」とほっとしたような笑顔で話してくれました。

ただ地震による影響が少しずつ薄れつつある一方で、ワッヂェ慈善病院周辺を含むザガイン市内の情勢は徐々に悪化しています。クーデター後の医療崩壊で安心して受診できる医療機関が限られるなか、最後の砦として私たちの元を訪れる患者さんのため、ワッヂェ慈善病院での活動を止めることなく続けてきましたが、残念ながら患者さんが病院に辿り着くまでのリスクや、そこで活動するスタッフが巻き込まれるリスクも高まっています。

それでも私たちが歩みを止めることは、決してありません。ワッヂェでの活動が徐々に難しくなりつつあるなか、6月からは最大都市ヤンゴンの郊外に手術活動ができる拠点を設け、そこで活動もスタートしました。

「どんな困難があっても、ここで医療を届け続けることを決して諦めない」という強い信念のもと、私たちを頼ってやって来る一人ひとりの患者さんやご家族に、これからも真剣に向き合い続けます。



ヤンゴン新拠点

ミャンマー専門医療プロジェクト 一口唇口蓋裂一

クーデター以降、今も続く医療者たちの職務放棄によって、特に専門性の高い小児分野の医療人材不足は深刻で、多くの病気を持った子どもたちが治療を受けられず路頭に迷っています。そのような状況に対し、日本の小児外科や小児循環器、そして口腔外科などの専門家の協力の下で、治療とともに現地医療者の育成にも力を入れています。

2019年より実施している口唇口蓋裂総合治療事業では、現地の口腔外科医に対する口唇裂・口蓋裂の手術技術指導に注力しています。生まれつき唇や上顎が割れているこれらの病気は、直接生命に関わる事がほとんどないこともあり、医療保険制度が機能していないミャンマーのような国では経済的理由で未治療の患者さんがまだまだ多いのが現状です。日本の1.8倍もの国土を有するミャンマーで一人でも多くの患者さんに治療を届けるためには、現地医療者の育成が必須となるため、日本の口腔外科専門医の協力を得ながら知識および技術の指導に努めています。

そして10月中旬には各地から集結した現地の口腔外科医たちとともに、ミャンマー第4の都市・パテインにて、口唇口蓋裂の患者さんに対する手術活動を実施しました。今回手術を受けたのは生後7ヶ月の赤ちゃんから一度も治療を受けたことのない25歳の男性まで、合計61名もの患者さんたち。の中には生後11ヶ月の双子の口唇裂の男の子も。ずっとこの日を心待ちにしていたお母さんのほっとした表情と、お互いの手術後の姿を不思議そうに見つめ合う兄弟の姿が印象的でした。

小児医療を取り巻く課題がまだまだ山積のミャンマーですが、病気を持った子どもたちや家族たちが生きる希望を失うことがないよう、ともに1つ1つ乗り越えていきたいと思います。



無事手術を終えた生後11ヶ月の双子の男の子

ミャンマー児童養育施設 Dream Train

多くの体験、学びを経て、未来へと羽ばたく

震災で幕を開けた2025年度。ヤンゴンでは大きな被害はなかったものの、情勢も相まって不安を感じる日々が続きました。そんな中でも Dream Trainの子どもたちは、多くの挑戦と成長を見せてくれました。リーダーシップ研修では社会性や主体性を育み、夏には水泳、ダンス、絵画、ヨガ、プログラミングなど多彩な活動を実施。さらに日本語を学ぶ子どもたちを対象にスタディツアーや日本大学見学や多くの方々との交流を通じて新しい価値観に触れ、帰国後も大きな成長を見せています。こうした経験は仲間との絆を深め、自信や将来への希望へつながっています。

また、今年も大学進学を果たす子どもが複数誕生しました。その中の一人、カチン民族出身の女の子は、経済分野で優秀な成績を認め「Eco Distinction」(優等評価)を受賞しました。日雇い労働を続けるお母さんのもとで育ちながらも努力を重ねた成果であり、Dream Trainの仲間たちにも大きな励ましを与えています。

子どもたちは今も日々努力を重ね、未来へ向かって歩み続けています。私たちはその頑張りに応えるため、より良い生活環境を整える建て替えプロジェクトも進行中です。これからも、子どもたちの笑顔が未来を照らす場所であり続けられるよう努めてまいります。



スタディツアーやお神輿を担ぐ経験も

03 ラオス プロジェクト初、小児がんの手術が実現

現地スタッフの、 地域の医療を担う意欲と覚悟を感じた半年間

2024年に始まった小児固形がん周手術期治療技術移転プロジェクト。今年7月、ついにプロジェクト初となる小児がんの本格的な手術が実現しました。日本から小児外科の医師を迎え、現地チームと連携して4名の子どもたちに手術を実施。そのひとり、腎芽腫のソンサイくんは数ヵ月にわたる化学療法治療を乗り越えて手術の日を迎えた。術後は家族もほっとした表情を見せてくれました。

10月には、カンボジアから嘉数医師が再訪。患児の診察や家庭訪問、抗がん剤の取り扱いに関する講義を行い、多くの現地スタッフが熱心に参加しました。限られた環境の中でも「子どもを救いたい」という想いは、国を越えてつながっています。

11月には、第2回手術活動を予定しています。ラオスの地で、救える命が一つずつ増えていくように。私たちの挑戦は続きます。



手術を終えたソンサイくんを見守るお姉ちゃん



患児の家を訪問する嘉数医師

による内科診療支援も実施。講義や診察時のディスカッションを通じて、知識だけでなく「どう患者さんと向き合うか」という姿勢にも学びが深まりました。現地スタッフが真剣な眼差しで取り組みながらも、生き生きと議論する様子がとても印象的でした。ウドムサイ県病院がこの地の医療を自ら支えていけるよう、最後まで丁寧に寄り添いながら、一緒に歩んでいきたいと思います。

ラオス北部のウドムサイ県病院で進めている甲状腺疾患治療の技術移転プロジェクトは、3年間のプロジェクト最終年に突入しました。これまでに8回の手術活動を行い、地域の医師や看護師たちが、毎週のフォローアップ診療にも主体的に取り組んでいます。最近では、患者さんやご家族からの紹介で新しい受診者も増えており、現場の信頼の広がりを実感しています。

9月に実施した進捗モニタリング会議では、関係省庁や病院関係者と共に、これまでの歩みを振り返りながら、最終年に向けた方向性を確認しました。また同月には、伊藤病院の鈴木医師



内科診療活動で現地医師とディスカッションする鈴木医師(中央)



04 災害支援・対策 南海トラフ被災想定地・高知県での防災訓練と能登

平時からの多機関連携で災害に備える

6月に県主催で行われた「高知県総合防災訓練」に、ジャパンハートも提携団体として初めて参加しました。

今年3月に政府中央防災会議が公表した最新の南海トラフ巨大地震被害想定では、最悪の場合、死者数が全国で約29.8万人に及ぶとされ、中でも太平洋に面した高知県は最も甚大な被害を受けるとされる地域のひとつです。ジャパンハートは、発災時により迅速で適切な支援活動を展開するため、3月に高知県と「大規模災害時等の支援に関する協定」を締結しました。

訓練では、実災害を想定して作成されたシナリオを基に救護所が設置され、高知赤十字病院や高知DMAT^{*1}など各医療機関の支援チームが患者役の大学生らをトリアージする一方、ジャパンハートは高知市保健師チームやDWAT^{*2}と連携しながら、避難所エリアに送られた避難者のスクリーニングや救護所のサポートを行いました。災害対応時に取り沙汰されるクリティカルな問題は、組織内のリーダーシップや多職種・多機関連携など、平時からの潜在的な課題であることがほとんどです。その意味において、平時の活動の中で顕在化した問題を各機関が議論してひとつずつ改善することが、何よりの減災に繋がることに改めて気付かされた訓練となりました。

*1 災害派遣医療チーム

*2 災害派遣福祉チーム



当日は72機関、約1,200名が参加しました

能登の人々の日常に寄り添い、日々の生活と健康をサポート

能登半島地震中長期支援活動として4月から輪島市門前地区で開始した訪問リハビリテーションでは、10月末までに約95名の方を訪問させていただきました。この活動では地域保健師との連携で、ジャパンハートの作業療法士チームがご家庭を訪問し、生活環境（手すりや段差位置、物品配置など）および生活動作（寝起き・立ち上がりなど）の確認と動線変更などの改善提案、日常的に実施可能な運動メニューの作成・指導と実施状況の継続的な確認を行っています。

仮設住宅に住むとある老夫婦のご家庭では、ご夫婦のうちお一人の持病が震災後に悪化し、入退院を繰り返すなかでほとんど寝たきりでの生活をされていました。狭い仮設住宅の中で慣れないベッドを使うことも憚られ、離床の機会が減っており、物音で隣人に迷惑をかけないようにと、壁にマットレスを立てかけて生活しています。一方、もうお一人は車の運転が出来ないため、日々の買い物などはパートナーを補助して車で約15分のスーパーまで行かなければなりません。体調を考慮しながらも少しでも体力低下を防ぐため、現在の状況で可能な運動や、体位変換についてお伝えし、継続してフォローを行っています。



お一人おひとりから話を聞く時間を大切に

今年6月、応急仮設住宅の入居期間が延長されることが発表されました。石川県内には6月時点で約9,400世帯が仮設住宅に入居中とされていますが、職人不足など外的要因もあり、次の住まいの目途が立たない方も未だ多くいます。住民の方々が出来るだけ健康な生活を維持できるよう、私たちはこれからも支援の在り方を模索し続けます。

小児がんと向き合う子どもたちの応援団

05 スマイルスマイルプロジェクト

「大好きな野球が観たい！」れんくんの想いで実現した、家族の時間

9月末に横浜スタジアムで野球観戦イベントに参加してくれたれんくんは野球が大好きな男の子。現在も治療を頑張っています。今回はイベント参加後にご家族から届いた感想を紹介します。

「入院前のようにみんなと野球がしたい。横浜スタジアムにベイスターズの試合を見に行きたい！」というのは息子が入院してからずっと願っていたことです。長期間家族と離れる寂しさや辛さ、突然普通が普通でなくなってしまったことへのストレス…ひとつひとつ乗り越える時、息子の気持ちを支えてくれたのがベイスターズさんの存在でした。

イベントの日が近くなってきた日は高熱、浮腫や喘息発作などがあり、本当に行けるのかと不安になる程の症状が出ていましたが、「ベイスターズを応援に行ける！」という本人の強い気持ちで当日を迎えることができました。スマイルスマイルプロジェクトの方々も不安が残らないように準備しましょう！と直前まで気遣っていただき、本当に安心して参加する事ができました。

息子の一番の夢が叶い、とっても良い表情を見せてくれたことが本当に嬉しかったです。イベント後もとても活動的になり、食欲も増えて心にもパワーをもらえたのではないかと思います。



そして、ずっと気になっていたきょうだいのフォロー…。

ずっと家族全員で揃ってのお出かけを我慢してきたこともあり、久しぶりにみんなでわいわいできたこと、子どもたちの笑顔、はしゃぎっぷりに嬉しく複雑な気持ちも混ざり…でもホッとしたのを覚えています。

家族全員がこの一日のおかげでこれからも頑張れる力をいただき、関わってくださった全ての方に感謝でいっぱいです！

また皆さんと元気にお会いできるのを楽しみにしています！

ありがとうございました。

06 吉岡秀人の海外医療活動が 今年で30周年を迎えました

「途上国で苦しむ人々を助けたい」という想いから医者になった吉岡秀人が、1995年ミャンマーでたった一人で医療活動を開始してから今年で30年。

2004年に「ジャパンハート」を設立した際は、たった数名の日本人およびミャンマー現地のスタッフしかいませんでしたが、30年の間に吉岡の理念や想いに共感し、ともに前に進む仲間が増えたことで、今では何万人もの子どもたちの命を救う活動へつながっています。

ミャンマー、カンボジア、ラオスなど途上国での無償の医療活動だけでなく、30年の間に国内外の災害支援や離島・へき地医療支援、小児がんと向き合う子どもと家族の心を救う活動など、「医療の届かないところに医療を届ける」活動はより広がりを見せています。

これもひとえに日頃より私たちの活動を支え、応援してくださる皆さまのお一人おひとりのおかげです。改めて感謝申し上げます。

カンボジアに新たな病院も開設し、これからはアジア全域の医療拠点としてより多くの患者に医療を届けていくことを目指しています。吉岡はじめ、ジャパンハートのこれから挑戦もぜひ応援いただけますと幸いです。

